

◆ ニュースレター おおば ◆

平成28年8月号

テーマ 『警察捜査の正体』

○：「警察捜査の正体」、講談社現代新書。著者は元・北海道警察警視長、釧路方面本部長だった原田宏二氏。2004年2月、道警の裏金問題について告白会見を開き、2007年2月には「市民の目フォーラム北海道」を設立するなど、警察の健全化、透明化、民主化、冤罪事件の根絶を目指して活動している人だ。組織を守る、と言えば聞こえはいいが、実際は自己保身に走る人間が多い中で、勇気をもって裏金問題を告白した姿は尊いと思う。多分、警察の世界では「裏切り者」呼ばわりされているのだろうが、ひるむことなく声を上げてほしい。

○：安保法制議論に隠れて大きな国民議論にならなかったが、刑事訴訟法の大改正も問題が多い。取り調べの可視化、司法取引(合意制度)の導入、刑事免責制度の導入、通信傍受の拡大、等々、本書ではそれぞれの問題点を指摘し、その

運用に危惧の念を表している。それは、テロの防止、凶悪犯人逮捕という大義名分のもと、警察が何でも出来る時代になり、「警察国家」への道が強化されつつあることに対する危惧だ。

○：日本は世界でも安全な国だ、と言われている。しかし犯罪(刑法犯)の認知件数は平成十六年に戦後最多を記録。その後、毎年十万件単位で減少している。一方、犯罪(刑法犯)の検挙率は、一九八五年には64・2%だったものが二〇一四年は30・6%だという。勿論、犯罪の態様も変わって来ているが、犯罪が減少傾向にある一方、検挙率も落ちている中、警察の権限が強化されつつある。それも通信の傍受やコンピュータ監視、監視カメラの増加など個人情報に踏み込む部分が拡大する中で、裏付けとなる法律の整備が十分でない点は問題だ。

○：犯罪から市民を守る、とい

う警察への期待は大きい。しかし階級制度のひずみ、パワハラ不祥事、誤認逮捕、冤罪事件など、警察への不信の声も少なくはない。またマスクミと警察との関係も、依然として記者クラブ中心の警察情報報道を見ていると、マスクミが権力監視の役割を果たしているのか疑問だ。国家権力を具現する警察。権力は腐敗し、膨張し、暴走する、と言われる。かけるべき歯止めをかけるのは政治であり国民だ。

○：多くの国民はこのような警察の変化に無関心だ。自分が捜査の対象になって初めて警察の犯罪捜査の正体に気がつく。自分が警察に同行を求められたり取り調べを受けることは無いとは思うが、巻末には、警察官の理不尽な取り扱いや違法捜査から身を守るための最低限のガイドラインが記載されている。そんな場面は想像したくもないが、誤認逮捕の事例が現

実にある以上、自らを守る術は知
っておいたほうが良い。